



(令和元年第2号)

○ 鹿児島史談会は平成25年10月に「百周年記念号」を発行している歴史ある史談会です。

手元にありますが、大正2年に歴史・地理に興味を有する十名ほどの方々が集まって発足したとあります。この中に20篇の論文が収められていますが、いずれも力作です。その中でも私が特に注目したのが神園紘さんという元県立松陽高校の先生が書かれた「鹿児島藩における倒幕の軍用金造りと華倉御飯屋(島津家別邸)について」というもので、以降初めて知ったその現地を3回訪ねましたが、非常にスリリングで興味の尽きないところです。千巖園の山に向かって右の方・花倉寄りにあります。原則は立ち入り禁止です。賃金？を造った島津家にとってはあまりいい場所ではないと思われるかも知れませんが、歴史を正しく理解すれば、私は何も隠すべきことではないので、整備して公開したらいいのと思っています。ブログでは、2014年4月1日と3日に出てきます。

泉谷山大圓寺について早速ウィキペディアで見ってみました。

なんと徳川家康が赤坂溜池に建立したお寺が源だとしてびっくりしました。

その後、歴史を経て、島津家の菩提所にもなり、明治41年現在地に移転したと知りました。

クマモト タツオ

○クマタツさん

大圓寺の一事をもってしても薩摩が関が原で徳川家に敵対したと家康は思っていなかったと思います。

こころあたりは、長州とは大違いです。 にしやま

○2019年5月27日(月) 10:34 Kazu Nishiyama <mfikazu@tkg.att.ne.jp>:

「史談会」という言葉は、「誰それが、何々と史談会で語った」

という表現でしか読んだことはありませんが興味深い集まりだと思います。

私は、50年ほど前、杉並区永福町(井の頭線永福町)、大宮八幡宮そばに住んでいました。

住んでいたすぐ近くの泉谷山大圓寺(せんごくさん だいえんじ)が

薩摩藩島津家の江戸での菩提所であることを、そこを離れて後になって知りました。

その寺の前は何回も歩いたことがありましたが、まさか、薩摩藩に所縁があるなどとは思っていませんでした。

調所広郷、幾島(篤姫の侍女)、菊子(西郷隆盛の娘)、横山安武などが葬られているそうです。また、「戊辰 薩摩藩戦死者墓」と刻む巨大な墓碑を中心に、維新前後に亡くなった薩摩藩・佐土原藩関係者の大小さまざまの墓碑数十基が整然と並んでいるそうです。

その中に三田の薩摩藩邸焼き討ちの犠牲者、留守居役篠崎彦十郎をはじめ多数が葬られているそうです。

○古代から近世に至る史跡はまだまだ未発掘のもがいかにかに多いかということが、この記事一つ見てもわかる気がします。

日頃の生活が忙しく、例えば自分の住んでいる所の裏山がそうであると知っていても、見向き暇もないというのが実情でしょうか。 実体験として、2014年6月11日のブログに書いていますが、老人会のバス旅行で南九州市の製鉄遺跡を訪ねたことがあります。のとき、学芸員に案内されて道路から少し下にある川の辺に鉄滓や陶器の破片がたくさん散らばっていました。許可をもらって持ち帰って写真を写してブログにも貼りました。今年の秋には、鹿児島史談会が大口の遺跡を訪ねる企画があるようです。私は所属していませんが、コーラスの先輩が会長をしているので誘われてさつま町などの史跡に行ったこともあります。今年も参加しようと思っていますが、そのときこの高熊山にも行ければいいなと思っています。 クマモト タツオ

○ 今日の④は面白かった？もしかして鹿児島歴史作家・桐野作人の助けを借りて編集しているのではないのかと思い今朝、丸善に行って「島津義久・桐野作人—PHP 文庫」を購入しました。しばらく村上春樹『ラオスには一体何があるんですか？』を一時中断して島津 4 兄弟を読んでみましょう。

それにしても関ヶ原の 30 年前、大隅軍（伊地知・肝付・根占・伊東—何やら馴染みの名前）が島津と互角に強かった。そして、鹿児島のお隣の始良町も大隅だったのにも驚きますね。

作人に負けない八期のふたりの解説にもしばらく楽しみです。

オオイシ 5月29日

○いつもありがとうございます。

天正 2 年（1574）2 月、伊地知重興、肝付兼亮、島津氏に降る。

9 月、琉球に書を送り、一時中断していた関係の修復を図る。

大友宗麟は琉球に使者を送るとき、島津の了解を得たという。西山

○島津一族は②から続く三州平定・統一の戦いを現在では考えられない永きに渡って繰り広げたのですが、②、④の戦いも大石くんが買ったという

桐野作人著「島津義久」に詳述されています。皆さんに一読を勧めます。桐野作人は確か出水の出身だったと思いますが、テレビにも出演したり、鹿児島でも毎年講演をしたりで大活躍です。薩摩・島津家を語らせれば日本でも有数の学者・作家だと思います。

伊東氏との戦いがどれほどの永きに渡ったのか。

飢餓の島津豊州家を狙う日向の伊東氏との抗争は天文 9 年（1540）から始まり、元龜 3 年（1572）島津方が木原崎の戦いで伊東義祐氏を破るまで実に 30 年以上かかっています。肝属氏にしても伊東氏にしても国人とは言いながら、いわゆるポット出の武人ではなくて、それぞれが元々は中央から派遣されて地域に根付き力を蓄えてきたので、誇りもあり、一筋縄ではいかなかったものと思われま。

その背景には肝付氏は島津氏より 2 世紀も前に下向したと言うし、伊東氏は元はといえば鎌倉幕府御家人であるといったようなことがあったからではないかと思われま。

なかでも伊東氏は、島津氏の守護国と同じ三カ国の支配を認められたとする偽文書まで作成し、島津氏が用いていた三州太守を伊東義祐が自称するなどしました。その背景には島津氏への強い対抗意識があったものと思われま。

以上 桐野作人「島津義久」、新名一仁「中世島津氏研究の最前線」、川口素生「島津一族」などを参考。

この時代も驚くような政略結婚が行われ、欺しや裏切りが横行し、壮絶な時代だったことが伺われます。

現代もある意味で息苦しい時代になりつつありますが、この時代の庶民はさぞかし大変だっただろうと思います。

5月30日 クマモト

○納得、納得！「作人義久」読み始めましたばかりだけど作中に自分がはまっていくほどのストーリー作家ではありませんがさすが歴史作家を自認するだけあって色鉛筆を横において読む本であることは確かです。文庫本にしては少し厚いけど参考書としては申し分ないと思いますよ。

2019 年 5 月 30 日（木） 8:18 隈元達雄 <takumamoto2@gmail.com>:

○クマタツさん 大石さんの島津義久レポートを楽しみにしています。

ある本の索引を見ると、島津家の中で、貴久の長男義久が最も多く次いで、次弟義弘、末弟家久、三弟歳久の順であった。貴久の索引も多く、他では、斉彬を別格として、重豪、久光などが多かった。

○大石さん、隈元さん、西山さん
興味深い情報有難うございます。崎元

○Subject: Re: 早版・三州統一⑤ 5月31日

私が初めて島津家の二人の家久を知ったのもそう昔のことではありません。添付した「島津家久と島津家久」～二人の家久～（尚古集成館発行）で見た数年前のことです。時代もほぼ共通しているので間違いやすいですね。

今日の⑤はちょっと意表を突かれた感じがしました。というのが、④の続きは三州統一の後に続いた九州制覇の夢を追いかけて戦った「耳川の戦い」「沖田騾の戦い」・・・などなどが出てくるかと思っていました。③の「くじと調伏」のときもそうでしたが、今日も「家久上洛の旅」で驚きです。新聞の記事を書くくらいの記者の視野の広さには勉強させられます。

記事にもあるように「薩摩の武将は教養を身につけていた」。なるほど、そうでなければ特にこの戦国時代は人を魅きつけて、引っぱっていくことはできなかったのでしょうかね。硬軟両方の幅広いものが求められたのだと思います。四兄弟の祖父・日新公（じっしんこう）は後の「郷中教育」の教えの基本になったと言われる「いろは歌」をつくっていますし、また四兄弟の長男・義久は晩年、隼人に移り住んで「茶」に傾倒下といます。その他にも義弘とかにもそのような話はたくさんあります。時代は移り変わり、重豪（しげひで）更にはそのひ孫の大石くんも言っている齊彬など日本の文明をを切り開いていった名君たちも文化的な教養人だったと思います。

ところで⑤の主題「家久上洛の旅」にある「家久君上京日記」のことです。別の本では「中書家久公御上京日記」とあったり同じものが別な名前と呼ばれたりしています。そこで、午前中にネットで走り読みをしてみました。東京大学史料編纂所蔵「中務大輔家久公御上京日記」（村井）という本が私でも何とか読めてそれなりに理解できる ひらがな 入で書いてありました。それより前、桐野作人の「島津義久」の中に、この5ヶ月ぶりに旅から帰った家久が義久に報告する部分を読んでいた私は、義久が「初めての上方はいけんじゃったか」と問い、家久が「京の町は見るも聞くも草深い薩摩とは大違いでござした。とくに女子（おなご）の白塗りはあか抜けておって、ほんなこつよかもんでござす」と答えて、そこから「信長」を見かけた話などに発展するのを読んでいたので、興味を持って一読しました。

しかし、文中にあるはずの信長や明智光秀とのことに読み進む前に、串木野を出発して九州を抜け出すまでの日記も面白く、小石原（焼き物の里で現在は有名）で泊まったことや、英彦山で山伏に迎えられたこと、豊前から小倉に歩を進めたことなど、私の知っている地名が他にもたくさん出てきて先に進めないほどで大いに楽しむことでした。もちろん、信長よ光秀とのことにもたどり着くことはできましたが、興味のある人は、読んでみてください。私も今度はゆっくり読みたいです。旅行記としても大変楽しめますよ。

クマモト タツオ



○今朝の三州統一⑤は『家久上洛の旅』 おおいし

昨日から『島津義久一桐野作人』を読み始めましたが隈元氏とは違い島津ストーリーは初心者なので基礎知識を入れようと四苦八苦の歴史紀行が始まりました。

今朝の朝刊をみて、ぼくも家久にひっかかっていたのでタイミングにびっくりしています。

というのが島津4兄弟の末っ子の4男・家久（今日の新聞の主演）ではなく次男・義弘の長男家久（薩摩藩初代藩主の忠恒こと）とが別人であることすら知らなかった。そして、この忠恒（家久）の破天荒ぶりに興味を持ちました。

かたや島津4兄弟の末っ子家久も実はなかなかの豪傑の武将で智略にも優れていたらしいですね。

エピソードをみると上の3人とはお母さんが違うので顔が似ていなかったとか。

新聞で活躍していた京上洛の頃の年齢が29歳で1587年に41歳の若さで亡くなっています。

この時、一方の家久、つまり忠恒（義弘の子）島津家18代は11歳ですね。なかなかの悪ガキだったらしく忠恒から家久に改名した時、周りは叔父とややこしいので「悪い方の家久（悪久）」とか呼ばれていたそうです。

ちなみに忠恒家久の方は1576年-1638（逝去）になっております。

何だか少し島津家のことが知れてきたようです。

ちなみに島津4兄弟はそれぞれすごい男たちですがこの4番目がもう少し長生きしていたら歴史も変わっていたかも、なんてことを読むとついもう一人の島津の賢君・斉彬のことに想いが馳せます。



○私が初めて島津家の二人の家久を知ったのもそう昔のことではありません。添付した「島津家久と島津家久」～二人の家久～（尚古集成館発行）

で見た数年前のことです。時代もほぼ共通しているので間違いやすいですね。

今日の⑤はちょっと意表を突かれた感じがしました。というのが、④の続きは三州統一の後に続いた九州制覇の夢を追いかけて戦った「耳川の戦い」「沖田畷の戦い」・・・などなどが出てくるかと思っていました。

③の「くじと調伏」のときもそうでしたが、今日も「家久上洛の旅」で驚きです。

新聞の記事を書くくらいの記者の視野の広さには勉強させられます。

記事にもあるように「薩摩の武将は教養を身につけていた」。なるほど、そうでなければ特にこの戦国時代は人を魅きつけて、引っぱっていくことはできなかったのでしょうかね。硬軟両方の幅広いものが求められたのだと思います。四兄弟の祖父・日新公（じっしんこう）は後の「郷中教育」の教えの基本になったと言われる「いろは歌」をつくっていますし、また四兄弟の長男・義久は晩年、隼人に移り住んで「茶」に傾倒下といえます。その他にも義弘とかにもそのような話はたくさんあります。

時代は移り変わり、重豪（しげひで）更にはそのひ孫の大石くんも言っている斉彬など日本の文明をを切り開いていった名君たちも文化的な教養人だったと思います。

ところで⑤の主題「家久上洛の旅」にある「家久君上京日記」のことです。

別の本では「中書家久公御上京日記」とあったり同じものが別な名前と呼ばれたりしています。

そこで、午前中にネットで走り読みをしてみました。東京大学史料編纂所蔵「中務大輔家久公御上京日記」（村井）という本が私でも何とか読めてそれなりに理解できる ひらがな 入で書いてありました。

それより前、桐野作人の「島津義久」の中に、この5ヶ月ぶりに旅から帰った家久が義久に報告する部分を読んでいた私は、義久が「初めての上方はいけんじゃったか」と問い、家久が「京の町は見るも聞くも草深い薩摩とは大違いでござした。とくに女子（おなご）の白塗りはあか抜けておって、ほんなこつよかもんでござす」と答えて、そこから「信長」を見かけた話などに発展するのを読んでいたの、興味を持って一読しました。

しかし、文中にあるはずの信長や明智光秀とのことに読み進む前に、串木野を出発して九州を抜け出すまでの日記も面白く、小石原（焼き物の里で現在は有名）で泊まったことや、英彦山で山伏に迎えられたこと、豊前から小倉に歩を進めたことなど、私の知っている地名が他にもたくさん出てきて先に進めないほどで大いに楽しむことでした。もちろん、信長よ光秀とのことにもたどり着くことはできましたが、興味のある人は、読んでみてください。私も今度はゆっくり読みたいです。旅行記としても大変楽しめますよ。

クマモト タツオ

○ メールありがとうございます。

幕末に活躍した人の多くが重豪の影響・恩恵を受けています。

明治維新の最大の名誉功労者だと思っています。 西山

○カリタス学園の倭文覚教頭 西山

先日、カリタス学園で不幸な出来事がありました。

亡くなられた方、負傷させられた、そのご家族の方々には本当に、お気の毒で悲しみも深いことと思います。

教頭 倭文覚（しとり さとる）さんは記者会見で当時の状況と対応を話されました。

事件当時の沈着冷静な対応に称賛の声が寄せられているとのこと。

私は倭文覚の名前を見てオヤッと感じました。

「倭文麻環（しずのおだまき）」の倭文です。

倭文麻環は、江戸で生まれて育ち、薩摩のことをよく知らない世子（齊興と推定）のために重豪が「薩摩の歴史・伝承、国ぶりや人々を知らせたい」と、記録奉行白尾国柱（しらお くにはしら）に命じて書かせたものだと思います。

「倭文（しず）」は古代の織物の1つで、麻糸などで筋や格子を織った物。

「倭文（しづ）」は「賤（しづ）」で、「いやしい、身分が低い」の意で、賤民や卑賤などと表されるが、「大したものではない」という程度の解釈が無難かもしれません。

「倭文麻環」の「麻環（おだまき）」は糸を繰り返して繰り返すの意味。

取るに足りない話を繰り返して献上しますという意味に使われている。

倭文 覚さんの姓は日本で結構古いものだと思います。

○ 貴重な情報ありがとうございます。

私も、記者会見を見ながら不思議な名前だなあとと思いながら、渡来人かと思っていました。

今日はこれから武・田上地区のグラウンドゴルフ大会で、明日は県の合唱祭です。

しばらく、ご無沙汰するかもわかりません。

クマモト

○西山さん

おはようございます。

あなたの 博識には また びっくり 薩摩 島津重豪さんまで出てくるとは・・・

勉強になります。

三州統一のメールについても いろいろな コメント 楽しみにしています。また、よろしく木場 祥雄

○6月3日 オオイン発

今日の三州統一⑦と鹿児島風土記の新シリーズ「南九州編の①」は興味深いものでした。

江平 望さん(92歳?)のお話、いい勉強になります。穎さんと言う親しい美人中国人がいるので何故か穎娃の後の字に引っかかっていた。

○いつもありがとうございます。 和・西山 6・3 14:38

この時代に、島津が4万もの大軍をなぜ編成できたかと思っていたら

鹿児島風土記、「穎娃の由来」に、薩摩の薩はサチのサツとあり納得です。

これに触発されて、先日の倭文麻環(しずのおだまき)で思い出したこと倭文麻環の物語の中に、男が、夜更けに、辻堂の前の岩に腰かけて笛を吹いていると、年のころなら二八(16歳)ばかりの世にもまれな美女が現れて、「私は山家育ちの賤の女(しずのめ)でございますが、今宵は中秋の良き日、..... どうか今夜は、私の家においでくださいませか」と誘われた。

誘いに応じて、一夜を過ごしたつもりが、が付いた時には、七日も経っていた。

「賤の女(しずのめ)」という言葉から「静御前」を思った。

白拍子の「静御前」は、源義経に初めて会ったとき名を聞かれて、「名もなき賤の女」と答えた。

それを聞いて、義経は「しずか?」と言った。

以後、その名は、「しずか」になり、やがて「静御前」と呼ばれるようになった。

「静」は源頼朝から、鶴岡八幡宮で白拍子の舞を所望された。

「しづやしづ しづのをだまき くり返し

昔を今に なすよしもがな」

(倭文(しず)の布を織る麻糸を丸く巻いた苧(お)だまきから糸が繰り出されるように、どうか昔を今にする方法があったなら)と「静」は、踊りながら謡った。

頼朝は激怒したが、妻の北条政子が「私が静の立場でも、あのように謡うでしょう」ととりなした。

「静御前」はミステリアスな美女であった

。西山博士は     よくまあ何でも知ってますね。

○いつもありがとうございます。 崎元雄厚

○ 先ず⑥の「あや船」要求のことですが、義久が琉球を支配していく様子が書かれていて、面白く読むことでした。

石見の銀山の存在が大きかったことは初めて知りました。

先日の「家久君上京日記」に、ここにも紹介があるように、家久が石見に寄った時に、加治木衆が夜に酒を持ってきたこと、また翌日には伊集院の大炊左衛門が酒やうりを持参したこと、更には喜入殿の舟に乗りたる衆、秋目舟の衆、東郷舟の衆など集まってきていろいろ接待をしたことなどが記されています。余談ですが、

石見のみならず、各地で差し入れや酒宴、接待が家久が寄る先々で繰り広げられています。守護・義久の弟ということで、各地の人々が大いに気を使ったものと思われます。このようなことから、権力の一端を知ることができました。

⑦では島津氏が天正5年（1577）四兄弟が力を合わせて130年ぶりに日向の統治を勝ち取った模様が戦国絵巻のように活写されていて、わかりやすく楽しみながら読むことでした。これから新聞ではどういう展開をさせるのか期待しながら待つことにします。

余談の余談

昨夜は森くんがラインで流したように、玉龍高校の同窓会幹事会がパレスイン鹿児島で開催されました。八期会からは、浜崎会長と森くん、それにピンチヒッターの私の3人が出席しました。

全校同窓会は8月31日（土）城山ホテル鹿児島で開催されます。

来年のことを言えば、2020年5月23日（土）玉龍八十年記念式典が宝山ホールで開催され、夜は城山ホテル鹿児島でパーティの予定とのことです。

クマモト タツオ

○懇切詳細な補足解説ありがとうございます。 6月3日12時 西山

玉龍8期にとって、80周年とは、ちょっとした巡り合わせのような気がします。

しかし、われわれも 古くなったものです。

○大石さん

こんにちは

此方は 今日 天気の方は 薄曇りといった感じで 明日も 悪くなさそうです。

さて、 四国旅行の件 いこまつーリスト 池田さんから メールないので 気になっていました。

来週 そうそうに 催促します。

よろしく お願いします。 しばらく 待ってください。

Sent: Sunday, June 2, 2019 10:47 AM **To:** 木場祥雄 **Subject:** 昆布のお礼

○おはようございます

今日は梅雨のような雨が降っています。

忘れていたけど、僕は神宗（昆布）のお礼を言うのを忘れていませんでしたか？

届いたのが土日だったので送金のことばかり気になって肝心の面倒へのお礼のメールを忘れていたような気がします。

改めてありがとうございます。

さて、堀田さんもさらなる旅行参加者募集に気になっているようですが、それとは別にそろそろ参加者に最新の資料を送ろうと思っています。生駒ツアーリストからの返信が届いたら発送準備にかかります。その際は代金の支払い期限なども教えてください。 keiji oishi

○6月7日 オオイシ発 耳川合戦 朝イチ版 今日 梅雨模様。

○ 西山返信

いつもありがとうございます。

なかなか、面白い躍動感のある島津にとって日の出の勢いがあつた時代です。

記述の終わりのほうに、「天正6年9月、大友氏が5万人とも言われる軍勢で、

日向への南下を始めた」とあります。5万人の編成と統率、糧食、宿泊、

そして、報酬・賃金の支払いはどのようになっていたのでしょうか？

それから4年後の天正10年には、織田信長が本能寺で明智光秀に討たれ、

それを倒した豊臣秀吉が天下を取った。まさに戦国時代も終盤にさしかかり

つつある時代ですね。

○ オオイシ返返信

そうですね。幕末維新も面白かった（歴史を知るという意味では）けれど室町から江戸に移るこの安土桃山時代（30年近い？）も負けず興味をそそられます。今では考えられない隣の町や村が敵同士になるかと思えば味方になると言った風で一体どこで敵味方を区別していたのか？考えればこわい時代でもありますね。

○隈元入りしました。

合戦についての今日の記述で、兵士も必ずしも志気が高い者だけではなかったのだと新しい発見でした。前にも書きましたが、私も島津史観に大きく囚われているのか、全てが志気も高く、高潔な戦士だけとっていました。しかし、やはりいろいろな人間がおり、綺麗事だけではすまないいろいろなことがあったのだと改めて思いました。

次に大友宗麟は、先ずキリシタンの教えを邪宗と罵り、宗麟の洗礼を受けることを反対した正室（奈多八幡大宮司の娘）を離縁したそうです。

そして南日向にここに書いてあるように「キリスト教的理想国」を造ろうとしましたが、南征に対しては家中にも賛否の声がありました。それは島津は難敵であり、加えて毛利や龍造寺の動向も予断を許さないという見方があったからだと思います。しかし、最後は宗麟の鶴の一声で出陣は決定されます。

一方の島津義久は、かつて「伊東四十八城」と言われた支城網を落としたことで伊東義祐主従を豊後の大友宗麟のところにおいやったのだが、伊東が宗麟の力を借りて再び攻め込んでくるということで、動揺は大きかったと思います。大友・伊東の鎮圧に手間取れば、反乱はさらに大きくなり、その間に高城を落とされれば、大友軍は真幸院や都城あたりまで攻め入ってくる恐れがある。そこまで押し込まれたら、島津軍を維持することはできない。帰順させた大隅や薩摩の豪族も大友に靡き、肥後の相良も兵を挙げる。高城の陥落はそのまま、島津の滅亡に繋がる…。そこまで思ったというのは言い過ぎでしょうが、いろいろな思いが去来したのは間違いないでしょう。

これが、今日の⑨までの展開ではと思います。明日以降に注目です。

今日は、書き込みが遅くなりました。

コーラスの先輩で遠縁に当たる人が、緊急入院されたので、見舞いに行っていました。

クマモト タツオ

○大石返事

いつもいつも適切且つ詳しい解釈、解説ありがとうございます今貴兄にいただいたカラー雑誌が役立っています。

何となくわかって来ました。安土桃山（戦国）時代が。

○再び隈元

「薩摩島津家」は入門編として読みやすいですね。

今回の新聞連載の感想を書くのに、昔読んだことは思い出せず四苦八苦しています。

ほんとに”ぼやしく”なったものです。

もう何回も読み返すしかないですね。

もうお休みの時間が近づいてきました。(笑) おやすみなさい。

クマモト

○西山入ります・

クマタツさん

伊東は島津にとって恩知らずの裏切り者ですか？

歴史愛好はボケ防止になり、

コーラスは、誤嚥性肺炎の予防になるそうです。

○クマタツさんの返事

西山さん

「伊東は島津にとって恩知らずの裏切り者ですか？」とのことですが、私は「恩知らずの裏切り者」とは思いません。ただ難しい問題ですね。

というのは、伊東氏は南北朝時代までは守護職である島津氏の被官(守護に従属するという意味での関係を持つ国人)であったので、島津氏が恩を売るといえばそうだったのかもわかりません。しかし、主従の関係を主は恩を売り、従は恩を被ったかとばかりは言えないと思います。従が主に対して反対の感情を抱くというのはこの世では多く見られます。

島津氏と伊東氏の関係も私見ですが、そのようなことがあったのかなとも思います。

というのも、以前このメールにも書きましたが、伊東氏が島津氏よりも200年も前に日向に下向した由緒ある家系のものであったことなどからすれば、遅れてきた島津氏の下につくことは、その誇りが傷つけられることであったことは言うまでもないと思います。そういう意味からも、恩義を感じるよりも逆の作用が働いたのではとも思います。それが、貿易の拠点たる饒肥地区をめぐる争うということから発展して、大きな戦いになっていったのではないかと思います。

この間いかけをもらってネットでも見てみましたが「伊東氏あらまし～伊東家の歴史館」などを見ると、伊東氏が島津氏よりも幕府と結びついて強大な権力を持たされたことなども書いてあります。なんでもそうですが、両氏の見方にも諸説があります。今後の研究課題でしょう。改めて歴史の奥深さを感じます。

クマモト タツオ

○クマタツさん

早急に ご丁寧なご返事ありがとうございます。 西山

○三州統一10 大石舜

やはり「耳川合戦」でシリーズ「三州統一」は終わりましたが実際は「九州統一」への1(プロローグ)が正しいのでは？

○6月8日西山さっそく返あり

いつもありがとうございます。

テンポのよい軍記時代小説風で、小気味がよらしい。

なぜすぐに「九州統一」に突き進むのか.....

大軍を相手に大勝利を収めた軍団の逸るやる気を止めることはできないと思う。

チャンスがあれば進む、いつの世でも、この間の戦争でも、負けるまで前進あるのみ.....



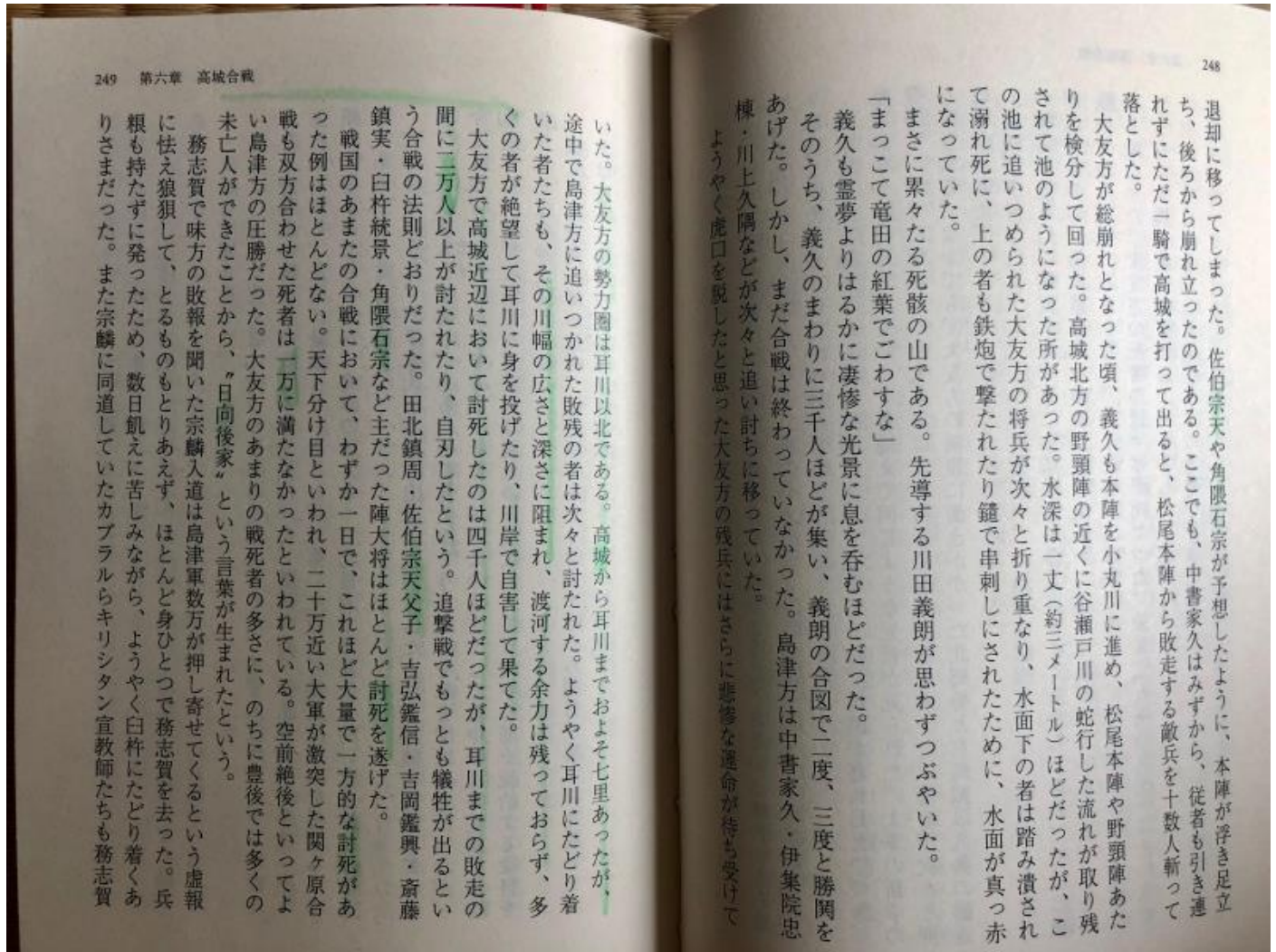
ところで、島津義弘公大河ドラマ誘致委員会というのが始良市、えびの市、日置市、清水町によって設けられNHKの会長に実施を申し入れているそうですね。

九州の大名はこれまでとりあげられていないとか一縷よりも大きな可能性がありそうです。

実現すれば、痛快、快挙！！

〇クマタツ博士よりご説明・・・

「先陣を駆けん 悲願の三州統一」も今日の、⑩の戦国絵巻を見るような耳川合戦で締めくくられてしまいました。次のシリーズが始まるのは7月でしょうか、8月でしょうか。次回もまた私の想像もつかないことを知ることになるかもしれないと思うと楽しみです。



⑩の締めくくりにある「島津氏はここに、三州統一を成し遂げた。だが義久、義弘ら4兄弟のこの後の動きは大きな謎だ」「三州統一を目指してきた島津氏はなぜすぐに九州統一に進むのか」とあり、3人の研究者の見解が述べられています。

一人は、「結果的に兵を北部九州に兵を進めざるを得なかった」と消極説をとり、一人は「やむを得ずという理屈を使って、領土拡大をはかった」と本当は積極性が隠されていたと言わんばかりの説を唱え、もう一人は「九州の覇者を狙った」と積極的に攻めたのではとの説をとっています。

私も「積極的に攻めた」説をとっていましたが、一つ興味ある論文を見つけました。

それは、何回か紹介している新名一仁編「中世島津氏研究の最前線」の中にありました。

松迫知宏氏の論文「島津義弘は、兄義久を超える実力者だったのか？」という中の最終章「おわりに一検討されるべき課題」という文章の中にあります。「島津氏が勢力を拡大することができた理由として、時として兄弟間の結束・絆が語ら

れる。そうした抽象的な言説を、根拠をもって乗り越えていかなければならない。島津氏の研究は、豊富な史料に恵まれる。しかし、豊富であるがゆえに大まかなストーリーをつかむ程度の検討で済まされ、見逃されてきた事実や検討不十分なままの事柄が多い。それでは島津氏が、いつまでも九州南端に位置する閉鎖的な存在という認識のままで終わってしまう。他大名の研究にも学びつつ、それらと並列に論じられる存在にならなければ、明らかにならないことは多い」とあります。

こういう論文を読むと、なるほどとも思ってしまう。

繰り返しになりますが、島津氏が「三州統一」のすぐ後に「九州統一」に向かったのは何故なのか先達の研究者の研究成果を待たなければならないのでしょうか。次回シリーズまで少しでも勉強しましょう。

クマモト タツオ

○クマタツさん

あなたの奮戦に期待して楽しみにお待ちしております。

○ 西山さん

「島津義弘」のNHK大河ドラマへの運動はおっしゃるように数年前から始良市(旧加治木町含む)からあっています。私も、もうすぐ実現するかなと思っていた矢先に「西郷どん」がいきなり発表されて、あのような形で放映されました。「西郷どん」は明治維新150年の風に乗ってフィバーしましたからあれはあれで良かったのですが、もし「西郷どん」がなければ、今年が島津義弘没後400年ということで放送が実現していたかもわかりませんね。そういうことで次に薩摩のドラマが取り上げられるのは少なくとも数年から10年くらい後になるのかなと思っています。せいぜい長生きしましょう。

クマモト タツオ

○メールありがとうございます。

実現するとしても数年から10年先ですかまあせいぜい長生きして あそこがおかしいここはあっていると褒めながら見たいものです。

それまで、義久を知るための時間はたっぷりありそうです。

○大石さん森さん

遅く成りました。四国旅行の最終版(6月7日付け) 18名ベースの 行程表 見積書をメールします。

いこまツアーリスト池田さん なかなか 忙しく 私が 作成しました。

念のため 10日(月)に 確認してもらいますが 問題ないと思います。

これで 進めてください。

一人当たり 54,181円 となりますが その他 雑費経費として 運転手さんへの心づけ10,000円 車中の飲み物、お菓子、お酒など 20,000円 として 一つ当たり約3,000円として 振り込み旅行代金は 57,000円 で 如何でしょうか?

振り込み銀行口座は 前回と変わっていないと思います。 前の記録ありませんか?

以上 宜しく お願いします。 木場 祥雄

○大石さん西山さん隈元さん木場さん

毎度のご配信ありがとうございます。

大石さんの新たな三州統一版の取り込み、投げかけに対する八期有志

とりわけ見識豊かな大石大兄 博識揃い一組ご三方による歴史観、一步踏み込んだ考察は 実に面白く楽しく 折々で勉強させられます。

いつの日か故北見俊夫先生を囲む「喜多見会(一組主体)」の折、歴史好きの草野さんは、

面白おかしく世の人間模様を語り、先生も出席されると、我々の話に興味

深々で、この会は話題が高尚で質が濃いとよく口にされ、先生は考えるもなく

一つの事柄の捉えは、限りの視点を巡らす⇒「意を持った一点確保の全面展開(転回)」
なるお言葉を頂戴し、皆が感じ入って盛り上がることでした。(通じるところがあるようです。)
どうぞ今後も興味が尽きないテーマ、武将たちのエネルギー、史実の解き明かしを
大いに期待です。 2019-6-9 中間

○中間さん

お元気な様子、何よりです。

北見先生のお話は示唆に富んでいますね。今更ながら「なるほどなあ」と思います。

私も、最近になって鹿児島島の「島津史観」のいいところと、鼻屑目に見すぎるところを見極めなくてはと思うようになりました。

そういうことを今回の「島津義弘没後400年」の南日本新聞のシリーズではいづらか踏み込んで新しい見方をしているのではと思っています。

とは言うものの、同じ歴史好きでも世界史、とりわけ中国の歴史などの分野の好きな家内に、私が「島津史観」一辺倒は改めるべきだと偉そうに言うとうと「お父さんこそ島津・薩摩藩・西郷一辺倒じゃないですか」といつも笑われています。福岡生まれの家内と、比べれば、薩摩の血が流れる私はいつのまにか「島津史観」になっているのだなあと自分でも可笑しくなります。

中間さんが現在住んでおられる宮崎はご存知のように鹿児島とは切っても切れないところで、今回の「先陣を駆けん 悲願の三州統一」の全舞台になった場所です。「西郷どん」でも西南戦争の「田原坂の戦い」に破れた西郷軍がその後、鹿児島への南下を阻止され人吉から宮崎を北上せざるを得なくなり、高鍋、都農、美々津などを経て延岡に達しています。その後、和田越、可愛岳を通りそこから山中を通り、鹿児島に帰っています。それだけに時代を超えて戦いの史跡も多く、私にとっては大変興味のある場所です。もっと早く歴史に通じておれば物見遊山だけの宮崎の旅ではなく、そのような場所にも訪れることができたのにと惜しまれます。

中間さんも興味があれば、地の利を活かして尚且つ体力と相談しながら、少しづつでも訪ねてください。

ではお元気で。

クマモト タツオ

○中間さん 西山です。

お元気な様子 何よりです

あなたが、東京から宮崎へ移られて少し寂しくなりました。

時折、有志参集により「緩々猿来隊」として、鹿児島に所縁のある場所を訪れそうであったのかと、語り合っています。

東京には、鹿児島や薩摩に所縁の場所がたくさんあります。

近くに住んでいたのに知らなかったということはしくありません。あの時、知っていたら.
年齢を重ねなければ分からないことは多いものです。

日向（ひむけ）の地、豊かな地で、古代より豊かで神話をはじめ、昔話の多いところだと思います。

○今日はお休みでいかがお過ごしでしょう。6月10日

歴史メールに対する反応がイマイチとっていましたが、最後になって沢山の反響がありましたね。

いつも皆さんが読んでくれているのかナシのつぶてで心配していましたが、密かに読んでくれていたのがわかりました。

まあ、次回シリーズもせっせと送ってください。私もできるだけ参加します。

クマモト

○6月10日 オオイシそうですね。

中間さんのお話しもそれなりの見方で楽しいですね。どうも大石と隈元の投稿を間違えているきらいはありますが。耳川合戦のくだりを読み且つ調べてたら近ければ行ってみたいくなります。でも大分（宗麟側）に近い高城

まではマイカーで行くのも大変かも。せめて幕末でもよく登場する飢肥（一度ちょっとだけ竹下くんと一緒に）覗いたことはありますが、残念ながら歴史背景的思い入れはありませんでした。

そのうち3人でいつか行ってみましょうか？

○それにしても耳川の戦いはすさまじい戦いというより大友軍の退去の際の大混乱は想像しがたいものです。ぼくはいたく興味を持ちネットを歩いてもっと詳しい本（資料）を見つけ、アマゾンに申込みました。

《後記》

○今日は6月12日です。昨日、崎元雄厚くんが僕の部屋を訪れました。昔（中学の頃）豎馬場陸橋の横にあった「美好野ラーメン」みたいなこってりなラーメンを食べたいと言って来ました。まああの手のラーメン屋はもうありませんね。もちろん「こむらさき」や最近復活した「のぼるや」もいまいちです。

天文館付近では僕としては「くろいわラーメン」のとんこつ味がいちばん好きなのでそこに案内したら珍しく休みでした。

仕方なしに近年テレビのラーメンチャンピオンで何年か前に優勝して、天文館に進出した「豚とろラーメン」（旧喫茶ママの跡）に行きました。5、6回は知人と連れだって行きましたが最後のスープが辛すぎてもう来ない。と思うのですがなんとなく来てしまいました。

案の定雄厚氏の評価はいまいちでした。若いころは中町近辺では「鷹ラーメン」一辺倒でしたが二代目になってからは流行ってはいますが僕の舌にはぴんときません。

近年で「美味い！」と思ったのは坂元から玉里の方に上がったところにある『仏跳麺 坂元店』の黒いどんぶりに入ったとんこつラーメンは一押しです。

天文館付近に戻ると少し離れているけど天文館公園横の『小金太ラーメン』も「くろいわ」の次くらいに好きなラーメンです。

年を取ると医者がスープは飲まない方が良いというらしい。まあ、ラーメンも月に1回くらいが良いんだそう。ラーメン屋の評価などする資格はないというのが結論かな。それでも、めったに食べるなら（文法合ってる？）珠玉の一杯を食べたいものです。最後に・・・

崎元くんはぼくとラーメン食べに行くのが目的ではなかったということを念のために・・・・オオイシ

○昔の市内上町付近地図（木場さん提供）から懐かしい場所（ラーメン屋も）を探してみませんか？

